

財団だより

# 多摩川

1983. 3. 第17号



●カルガモ（ガンカモ科）  
川原の草むらで繁殖する



## ■ 多摩川博物誌 ■

筏流し これは、NHKの取材の為、筏師であった高野近太郎氏の協力で見学されたものである。昭和44年 青梅市郷土館所蔵

### ① 多摩川のいかだ師

へきのう山さげ きょう青梅さげ  
あすは羽村のせきおとし  
へ今朝の寒さに 乗り出すいかだ  
家じゃ女房が送り舟  
へ山できる木は 数々あれど  
想いきる気はさらさない

いなせな、ねじり鉢巻のいかだ師。あざやかな竿さばき。長い丸太を組んだいかだが、急流岩をかむ御岳溪谷を下る。(中略)

多摩川一帯のスギ、ヒノキが搬出されるようになったのは江戸時代から。フシのない良材が、人口の急増する江戸の材木商に「青梅材」と呼ばれて重宝がられ、さらに頻発する江戸の大火がその隆盛期を生んだ。

青梅市史によると、羽村せきから上流のいかだ師は、文化六年で百十四人。仲間組織をつくり、御岳付近から千ヶ瀬までのコースを「青梅下げ」と称し、一人一枚のいかだを受持つこと、千ヶ瀬から下流は一人二枚といった取決めをしていた。

御岳から六郷羽田のいかだ宿までの賃金も、七日分と定額が支払われていたが、なかには互いに示しあわせて、一人三、四枚につきたして乗るものも多かった。このため、川下の用水せきをこわしたり、アユ漁の瀬切りをつぶすなどのトラブルも絶えなかったという。

天保十三年の史料によると、いかだ乗りの労賃は、

日当三百九十四文。田畑作業の日雇が百二十文程度だったので、同地方の賃金ランクでは、常に一位。この定額のほかに、わらじ代や宿で自炊する米が支給されていたから、結構な稼ぎとなった。だから、途中の府中の宿で気前よく遊びほうけ、山林地主があわてて、金を届けたという話も伝えられている。

いかだ流しは、大正ごろまで続けられていた。同じ御岳に住む市文化財保護委員、清水利さんは「いま山から碎石を運んでいるダンプカー運転手のように、いかだ乗りは羽振りがよかった。御岳の上流では管流しといって、木材をバラのまま流してきたが、ときには、川底が見えなくなるほど大量でした。それを藤づるなどでいかだに組んでいましたね。」

羽村せきは一週間に一回、しかも、一時間ほどしか開かれなかったのに、このときには、せきの上流はいかだが数キロにわたって連なり、いかだ乗りたちはいくさのように立ちまわったという。しかし、青梅鉄道が敷かれ、トラックが走るようになると、いかだも時代の流れから取残された。大正末、いかだ師が長い竿をかついで六郷から帰る姿は、ふつつり消えた。いまも御岳溪谷の流れは青く澄んでいる。が、川べりの青梅街道はダンプカーが土煙をあげて、碎石を運ぶ。

(武蔵野風土記・1971・朝日新聞社編)

## 多摩川散歩

### ●野川流域はけの道を行く

自治体問題研究家 林 茂 夫

野川は多摩川の支流である。国分寺崖線に沿って湧出する湧水を集め水源としており、この段丘崖の連なりを古くから“はけ”と呼んでいる。

国電中央線武蔵小金井駅で南口に下車し、駅前の小金井街道を南に進み、都道三鷹・国分寺線との交差点をこえて下り坂を約100米、太陽信用金庫の角を左に入る道が“はけ”の入口になっている。この間徒歩で4、5分の距離である。

道なりに坂をおりると右手に真言宗金蔵院がある。寺門の正面がはけの道の起点となっている。明和7年（1770年）の火災にもかかわらず、過去帳は焼失を免がれ、慶長年間以降の記録が保存されており、寺内には樹令300年をこすケヤキとムクの木がそびえている。

はけの道からそれて南へ約100米行くと、西念寺南側の墓地に幕末の侠客小金井小次郎の墓があり、墓碑銘は山岡鉄舟の筆による。

はけの道に戻ると2、30米ですぐ谷口家の湧水の細流に出会う。同家の湧水はかつて「黄金井」と呼ばれ、地名の小金井の起源となったといわれており、流れは細くとも水はきれいに輝いている。

小金井二中の手前を右に曲がると小金井神社がある。同社は元久2年（1205年）に建立され、祭神は菅原道真で近年受験生の参詣が多い。境内には杉やケヤキの大木がうっそうとそびえている。

はけの道に戻り二中をこえてしばらく行くと、中村家の湧水に辿りつく。「土地の人はなぜそこが

“はけ”と呼ばれるかを知らない。」という書き出しで始まる大岡昇平氏の「武蔵野夫人」に登場するヒロイン宮地道子の家は、この中村家である。同家の湧水は、往時を偲ぶよすがもない細々とした細流となってしまっている。

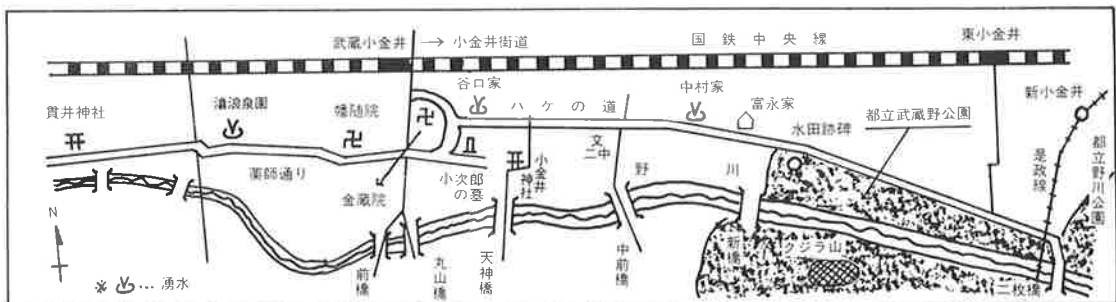
しばらく進むと急に視界が展けてくる。そこは都立武蔵野自然公園である。野川の南側はすでに公園が完成しており、ワンパク夏祭りの主会場となるクジラ山が望見される。野川とはけの道の間は野川調節池の工事が進められている。野川ははけの道に併行し公園の真中を東へ貫流している。

はけの道からの同公園への取りつけ口に水田跡の碑が建っている。この流域はかつて有数の米どころだった。盛期には約50haの水田があったが、上流地区の都市化に伴い野川の汚濁が進行し、300年も続いた田んぼも、昭和45年を最後についに姿を消した。水田耕作の歴史の記録とモミを壺に納めたカプセルが、同碑下に埋め込まれている。

武蔵野公園を右手に是政線のトンネルをぬけると、約1.6kmのはけの道は終り、都立野川公園につき当たる。野川が貫流する広大な園内は、休日ともなればかなりの賑わいをみせる。同公園の入口から是政線の新小金井駅までは、徒歩で10分たらずの距離である。

野川の清流が失われてすでに久しい。はけのミドリも残された部分はわずかとなっている。先土器時代からの遺跡が各所に点在する野川流域の環境の保全が急がれる。これが歩いた所感である。

野川とハケの道周辺図



## 私と多摩川



冠水した府中市多摩川緑地（昭和49年9月1日）

私立東亜学園高等学校教諭 金田 邦 男  
昭和47年1月、日本野鳥の会の川名氏から“多摩川の河川敷が公園になる計画があるので反対したい。”との連絡があった。それまで事務局の一員として活動していた尾瀬の問題が一段落していたので積極的に協力することを約束、数回の準備会を行った後、47年4月“府中の自然を守る会”が発足した。

河川敷公園化計画の対象となった関戸橋上流地域は、大河川の中流域特有の砂礫地が発達し、カワラサイコ、カワラナデシコ、カワラハハコなどの河原植物が群生し、秋には珍種、カワラエンマコオロギの声を聞くことのできる、自然環境に恵まれた場所で、すぐに公園やグラウンドに姿を変えた下流地域一帯の味気ない景観も手伝って、反対運動は地元住民を中心に高まり、計画は中止されるに致った。

広大な河川敷は、公園・グラウンド用地として魅力的であるが、公園・グラウンドはどこにでも造れるのに対し、河原は造ることができないばかりでなく、都市の住民にとっては緑あふれる“いこいの場”となっていることから、公園・グラウンド用地は他に求めるべきである。また、中流域の河川敷は、安定した下流域とは異なり冠水しやすく、



カワラナデシコ（ナデシコ科）  
夏から秋にかけて優美な淡紅の花を開く

河川のはたらきである浸食と堆積の両方の作用を受け、はげしく変化し、関戸橋下流の公園も49年9月1日の豪雨で写真のように冠水し、その後も何度も冠水していることから、公園・グラウンドには適さないといえよう。

私が多摩川のほとりに転居してきたのは高校一年生の春であるが、それまで住んでいた杉並区の住宅地と比べ、多摩川の恵まれた自然は四季おりおりに変化し、自然が好きな私にとって最良の学習場所となり、府中の自然を守る会発足後は一層深い関係となっていった。春は暖かい日差しの中で空高くさえずるヒバリや美しく咲く花の観察会、草原にカルガモの卵を見つけたのは6月の観察会であった。夏は炎天下の植生調査が辛い思い出として残っている。秋は鳴く虫やカワラノギクなどの観察会、カワラエンマコオロギの声を録音するために一晩中歩き回ったこともあった。冬は渡り鳥、石こうを使った足型とり、植物の越冬などの観察会、草原から飛び出したキジに驚かされたこともあった。53年には、関戸橋周辺を自然観察路としてまとめ、自然観察路研究会から小冊子を発行した。

最近治水対策が進み、冠水することも少なく、下水の流入による地味の変化もあり、アレチウリ・オオブタクサなどの帰化植物が繁茂し、景観も以前と異なってきたのであるが、今年の台風10号やそれに続くいくつかの台風による冠水で大きく浸食されてしまい、自然の営みの力強さを感じさせてくれた。その後、京王線橋梁修復工事のためのブルドーザー導入もあり、礫だけの河原になったが、ここにどのような植物が侵入し、植生を変化させ、昆虫や小動物が棲みついていくか、見守っていきたいと思っている。

## 甦れ！多摩川

### ●国分寺市公共下水道

国分寺市の公共下水道が、多摩川流域下水道の国分寺幹線に接続され、その通水式が行なわれたのは今年の12月27日の事である。国分寺市は多摩川左岸の支流、野川の水源地帯を占める市域で、下水道整備の遅れから、野川へ生活排水を流し続けてきた。それが、ようやく、一部ではあるが、下水幹線を通して、府中市押立にある多摩川流域下水道北多摩1号処理場へ送られる事になったわけだ。そして、2～3年後には野川への汚水流入は全てなくなる予定とされている。

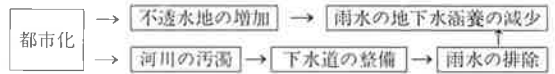
野川の水源は、ハケと呼ばれる国分寺崖線から出る湧水である。ところが、流域の市街化に伴ない大量の生活排水によって下水路と化していた。そして、その最たるものが、最上流から流れ込む国分寺排水でもあった。国分寺市の下水道整備率は、面積比で約20%（昭和57年度予定）と低く、野川の流水は汚水量が大半を占めていた。その流量が失なわれるのだ。野川に清流がはたして甦えるのだろうか。

国分寺市の下水道は合流式である。これは、生活排水も雨水も同じ管に流れ込み処理場へ送られる。降った雨は、地下水とならず廃棄物として捨てられる方式になっている。一方、野川の水源は本来ハケの湧水であった。国分寺崖線の湧水点は、現在確認されているだけで、86ヶ所にもものぼる。そして、その中のいくつかは、現在でも豊かな湧水量を持ち、かつ清冽な水質である。ところが、雨水が地下に浸透しなくなったら、この地下水はどうなるのだろうか。

昨年3月、世田谷区の代表的な湧水池である神明の森みつ池（成城4丁目）が突然枯渇した事がある。区役所では初めての事に驚き調査した処、崖上の成城地区が宅地化した為、雨水浸透が減少したからだろうと判断した。

市街化は、雨水の地下浸透を妨げ、地下水位を低下させている。又消防研究所の細野氏によれば、

下水道の整備は、河川の無降雨時の流量を極端に減少させると指摘している。これには、さまざまな要因がからんでいる。つまり、

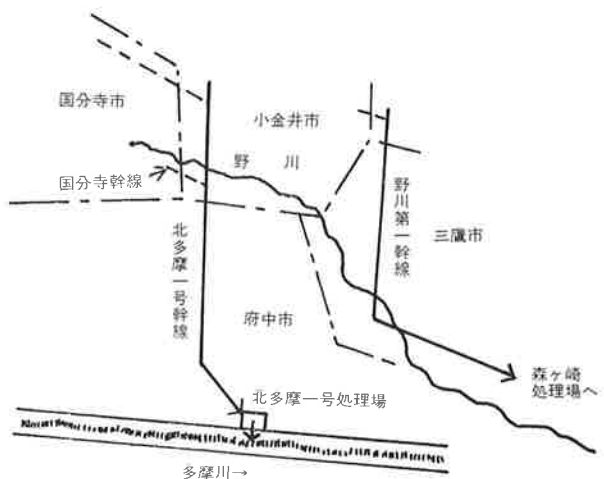


といった図式になる。とどのつまり、都市化は湧水にとっては悪影響を及ぼす。さらに、下水処理場に流入する汚水の中に、生活排水、工場排水に混って不明水といわれるものがある。これは、地下水が主で、昭和54年の野川流域下水道を処理する森ヶ崎処理場では、年間処理量130,960tのうち約26%をも占めている。

国分寺市の公共下水道は確かに野川への汚水の流入をカットするはずだ。しかし、そのことで野川に清流が甦るのは、短絡にすぎないか。野川を甦らせるには、汚水を流さない事と、湧水の保全とが同時に行なわれなければ何の意味もない。清流をつくり出すシステムは、地表と地下がバランス良く水の循環を支えていなければならない。野川はまだ清流化の望みを大いに秘めた川である。それ故に、慎重に清流化への計画づくりは進めていくべきだろう。

文責 山道省三

### ●野川流域下水道



## 財団の事業紹介

### 〈研究助成〉

昭和57年度第2次及び第3次選考委員会に於て下記の研究助成課題がそれぞれ選考され決定いたしました。

#### 第2次選考

研 究 課 題	代表研究者	所 属
<b>〈A類研究〉</b>		
● 増水による河辺植生および立地の変化と復元に関する研究	曾 根 伸 典	自然環境科学研究所代表
● 洪水による南浅川上流域の水生昆虫群集の破壊と現存量の遷移	小 倉 紀 雄	東京農工大学農学部助教授
● 多摩川における汚染有機物の流出除去過程に関する研究	石 渡 良 志	東京都立大学理学部助教授
● 多摩川水系の汚染と自浄に関する総合的調査研究〔生物学的に見た多摩川のあるべき姿〕	近 藤 典 生	財進化生物学研究所理事長
● 多摩川の生物による水質汚濁の基礎研究、流下藻の実態について	福 島 博	東京女子体育大学教授
● 多摩川流域およびその周辺地域における降雨分布の微細構造の気候学的研究	西 沢 利 栄	筑波大学地球科学系教授
● 多摩川をめぐる自然環境の保全・回復および利用の計画に関する基礎的研究〔洪水と渇水の状態を考慮した計画〕	立 花 直 美	立花建築環境計画事務所代表
<b>〈B類研究〉</b>		
● 多摩川のケイ藻の生態と分類	寺 尾 公 子	東京女子体育大学職員
● 高校生物の野外実習の場に多摩川をとりあげ、多摩川の汚染の現状と環境保全について考えさせる	彦 坂 滋 春	都立永山高等学校教諭

#### 第3次選考

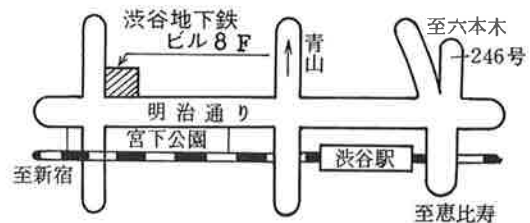
研 究 課 題	代表研究者	所 属
<b>〈A類研究〉</b>		
● 多摩川水域微生物相の季節変化に関する研究	出 口 吉 昭	日本大学農獣医学部教授
● 多摩川における湧水の涵養機構に関する研究	高 村 弘 毅	立正大学文学部教授
● 多摩川流域の都市におけるヒートアイランドの気候学的研究	山 下 脩 二	東京学芸大学教育学部助教授
● 多摩川に流入する丘陵地小河川の流出機構ならびに水質特性に関する研究	田 中 正	筑波大学地球科学系講師

## ●多摩川シーズンニュース

(この欄は、四半期の多摩川での出来事を整理したものです)

- 昭和57年12月2日 毎日新聞  
台風20号による傷跡も生々しく  
奥多摩有料道路4ヶ月ぶり開通
- 昭和58年1月1日 朝日新聞  
残したい自然 百ヶ所を選定  
東京からは多摩川、高尾山、秋川渓谷
- 12月7日 朝日新聞  
都天然記念物・羽村の大ケヤキ「重症」  
下水工事で水枯れ? 樹勢衰え倒木の危機
- 1月5日 朝日新聞  
働く庶民の姿ほのぼのと  
松下紀久雄 三多摩むかし絵展
- 12月18日 読売新聞  
緑の保全、力強い助っ人  
日野の「0.1平方メートル運動」が始動
- 1月9日 読売新聞  
多摩川、森山の渡しに立て札  
船頭の子孫が記念に
- 12月19日 読売新聞  
14万匹を来年も放流  
東京にサケを呼ぶ会
- 1月12日 読売新聞  
毎月一回、歴史学習重ねて300回  
「多摩郷土研究会」32年目の「偉業、
- 12月20日 朝日新聞  
多摩ニュータウンで排水路崩れたまま4ヶ月  
台風禍の乞田川と大栗川
- 1月14日 神奈川新聞  
多摩川と親しもう 多摩区・稲田公園  
「さかなの家」春にお目見え
- 12月23日 読売新聞  
「多摩川にサケを、来年も  
第一陣、フ化作業始まる
- 1月22日 読売新聞  
秋川の汚染許せぬ! 町ぐるみ反対運動へ  
五日市の廃棄物処理場建設計画
- 12月25日 読売新聞  
国分寺公共下水道完成で野川に清流復活  
水害防げ、魚も住める
- 2月9日 朝日新聞  
芽ぶきに必要、雑木林を根元からバッサリ  
日野の自然を守る会が保存運動として計画

- 発行日 昭和58年3月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)400-9142



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1  
TEL (0488)31-8125